

## 言語類型学と品詞 —形容詞のあつかいを中心に—

言語類型学といっても、その中にはさまざまな取扱いがある。筆者が多少とも接する機会が多く、また興味を持ってもいるのは、ゲー・ア・クリモフに代表されるロシア・ソヴェトのいわゆる「内容的類型学」*contensive typology* である。この種のもは、英語にも翻訳されることが少いために、特にわが国ではあまり馴染みがないように思われる。従って、すくなくとも必要最小限の説明は、共通の前提として為されなければならないであろう。

これまで、言語類型という名で呼ばれているものの中で最もよく知られているのは、孤立語、膠着語、屈折語といった分類である。中国語のような孤立語は最も原始的で、屈折語が優れているという考えはすでにフリードリヒ・シュレーゲルにみられる [6, pp. 45 & seq.] が、これらの類型を言語的思考の進化の段階としたのは、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトであった [1]。アウグスト・シュライハーはこれをうけて、言語の類型的分類を試みた [7]。これらの分類は、伝統的な「言語起源論」が主として語彙の面に注目していたのに対して形態の面を重要視したという点で、原理的に一步を進めたものであったが、これは「分析的類型」、「統合的類型」、「多統合的類型」というような分類と並んで、それぞれの言語の「語を構成する多様な要素が相互に融合する度合い」あるいは「相対的統合性または苦心の程度」 [5, pp. 20-22] という、形式的、量的な基準でしかなかった。

エドワード・サピアはこのような形式的な分類に対する批判から、文中に表された概念と、概念を表すために用いられた文法的な手順との関係という観点から文を分類し、これによって類型を建てようとした。彼は

- 1 「基本（具体）概念」
- 2 「派生概念」
- 3 「具体的関係概念」
- 4 「純粋関係概念」

を区別し、これの組み合わせによって、「単純な純粋関係的言語」、「複雑な純粋関係的言語」、「単純な混成関係的言語」および「複雑な混成関係的言語」を区別しようとした [4, pp. 100 & seq.]. 1 は対象、行為、性質などを表すもの、2 は book に対する booklet のような「質料的」なもの、3 は性、数などのように、ある言語では文法的な一致をして、他の語に対して関係的に働くが、例えば日本語のように、質料的な意味しか持たないもの、4 は主語、述語、目的語のように、それを欠けば文が成り立たないようなものである。

この分類法は、内容から形式へ進むという点で、プラーグ学派の機能的立場と基本的に同じであり [2, p. 439]、内容的類型学の方向に大きく一步を踏み出したということができ

る。サピア自身も認めているように[4, pp. 138 & seq.], この分類は余りに大きすぎるが、それだけでなく、同じ言語の中でも、名詞のある部分は単純な純粹関係的言語であるが、ある部分は複雑な混成関係的言語に属するというように、下位体系における支配的類型が異なる場合もしばしば見られるという欠点がある。ヴラヂミール・スカリチカが、「類型学的構成体」という概念を用いて、類型を構成する各々の要素が一つの構造を構成するという考えを提唱したのも、この点を考慮したものと考えられる[8]。これは演繹的に孤立語、膠着語、屈折語、多統合語、内的屈折語などの理想型を考え、具体的な言語の類型をこの理想型からの変異によって計ろうとするものであると思われる。

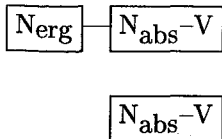
以上のような方法は、そのいずれもが言語を一意的に分類できないという、共通の問題点を含んでいると思われる。その原因は分類基準が恣意的であるために、どの分類基準を採用するかによって分類そのものが変わること、およびその分類原理が当該言語のすべての部分にわたって、必ずしも同じように適用することができないことによっていると考えられる。

これに対してソヴェトにおいては、今世紀の20年代の終わりから思惟と言語の問題がさまざまに論議されてきたが、これはやがてすでに述べたゲー・ア・クリモフによって一応の集大成がなされ、現在更に研究が盛んに行われつつある「内容的類型学」という形をとった。紙幅の関係上この学の成立史については述べないが、一言でいえば、これはすべての言語は、主語・述語・目的語の関係のあり方によって異なった類型に分類されること、また言語のさまざまなレベルの現象がこの関係のあり方によって規定されること、いいかえれば、この関係が基本的なものとして、当該言語の構造を規定するヒエラルキーの頂点にあることを主張するものである。

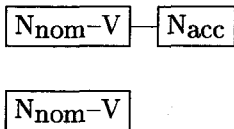
この基本的な関係によって規定されるものをクリモフは「包含事象」implicationsと呼んだ。これに対して、ある類型の言語の包含事象ではないが、その類型に属する言語にしばしば見られる一群の現象は、「随件事象」frequentariesと呼ばれる。これはやがてこれに先行あるいは後続する他の類型の基本的な関係の包含事象であることが判明する。このことによって、類型が変化すること、またある類型がどの類型から発展したものかが、理論的に決定できることになる。

ロシアは帝政時代からコーカサスをその版図におき、したがってこの地域の諸言語の研究は古くから行われていた。そしてこれらの言語がインド・ヨーロッパの言語とはかなり違った構造を持っていることは、早くから知られていた。能格言語である。これは行為者を表す有標的な能格 ergative case と無標的な絶対格 absolute case からなる文の構造を持っていた。能格と絶対格を持つ文では、能格が意味上の主語、絶対格が意味上の目的語を表していた。ところが能格のない文では絶対格が意味上の主語となる。動詞は大体自動詞と他動詞に近い区別を持っているが、やがて自動詞・他動詞とは少し異なり、意味的に自動詞であっても、能格を主語として取るものもあることが分かってきた。(ここでは能格類型にしばしば見られるいわゆる情緒動詞 verba affectuum とこれによる情緒構文につ

いては省略する [14, pp. 68-69].) そして動詞は原則的に能格とではなく、絶対格と一次的に文法的な一致をすることも知られている。すなわち、



念のために印欧語が属している対格言語のばあいをあげれば、ここでは動詞は無標的な格である主格と文法的に一致し、有標的な対格をとるかどうかに従って、他動詞と自動詞という文法範疇を区別する。



ところがその後シンタグマの関係は能格言語とほぼ同じであるが、これとは区別すべき類型のあることが、分かってきた。この言語は active languages と呼ばれているが、筆者は仮にこれを「活格言語」と訳出している。アメリカ・インディアンなどの諸言語、パプアの言語などがこれに属する主なものであるという。活格言語の存在とその特性がわかって来るに従って、能格言語は活格言語と印欧語に見られる対格言語の中間的存在であること、能格言語の特徴に余りはっきりしない点があるのは、その中間的な性格による為であることがよく理解されるようになってきた。したがって、これらの言語類型の特徴を説明するためには、活格言語についてみるのが適当と思われる。

この言語では動詞のカテゴリーが自動・他動の区別ではなく、行為動詞・状態動詞の区別に基づいている。この分類の基底にあるのは、対象が生物であるか、非生物であるかという区別である。言語によってはこれはロシア文法でいうような活動体と不活動体の区別であることもあるが、この両者の相違は植物がどちらの類にはいるかの違いに起因しているに過ぎない。従ってこの種の言語では、名詞は生物性のばあい、行為に積極的に関わることを表す有標的な活格 active case、および積極的には関わらない、無標的な絶対格の何れにも立つことができるが、非生物性のばあいには、絶対格しか持たないことになる。活格に立つ名詞は行為動詞と共に用いられ、意味上の主語を示す。この際に絶対格に立つ名詞を伴えば、それが意味的な目的語となる。

たとえばいま「A が B を殺す」および「B が死ぬ」という事態を考えてみれば、両者に共通するのは、「死ぬ」という過程が B なる対象の上に起こるということに違いない。そのような過程に責任がある対象が存在するかどうかは、また別の問題である。極端に言えば単なる認定の問題に過ぎない。呪詛が有効と信じられている文化においては、遠くはなれた人物も A として認められよう。しかし「死」という過程がそのうえに生じる対象なくしては、どちらの事態も存在し得ない。したがって「殺す/死ぬ」という行為が、まず B

と結びつき、これと文法的に一致するのは、むしろ事実のより忠実な反映と考えられるのである。これに対して A の存在は二義的である。このような言語の論理からすれば、同じ絶対格に立つ名詞が、意味上の自動詞の主語となり、また意味上の他動詞の目的語になるのは、当然である。これが奇異に感じられるのは、我々が無意識に対格言語の論理に立っているからに外ならない。

たとえばスー語族のダコタの言語で、活格系列の指標 wa- (1人称)、ya- (2人称)、絶対格系列の指標 ma- (1人称) についてみれば、次のようになる [14, p. 34]。

wa-t'i	「私は住む」
ma-síca	「私は悪い」
ma-ya-k'te	「私をおまえは殺す」

もし絶対格を伴わなければ、その動詞は意味的に自動詞になる。したがってこの言語では他動詞と自動詞の区別は文法的なものではない。「歩く」と「運ぶ」、「走る」と「追う」、「燃える」と「焼く」、「死ぬ」と「殺す」などは同じ動詞なのである [14, p. 84 & seq.]。

逆に絶対格は、状態動詞と共に用いられるとき、意味上の主語となる。たとえば「必要である」、「疲れている」、「思う」のような語彙は生物性の絶対格と共に用いられる。これに対して非生物性の名詞は状態動詞としか用いられない。

一方、同じ状態を表す動詞であっても、生物性に関するばあいと、非生物性に関するばあいで、語彙的に区別されることになる。たとえばナヴァホの言語では、「いる」/「ある」は tí (生) -tél (非生)、「横たわる」 tí<sup>n</sup> (生) -'á (非生)、「動く」 -hááh, -ya (生) — kéé (非生) に見られるとおりであるという [14, p. 114]。

状態動詞は多くのばあい、対格言語では形容詞によって示される。したがって活格言語には連辞が存在しないのが原則である。これと関連して活格言語においては、形容詞が存在しないことが、近年になって認識されるようになってきた。クリモフ自身、『活格言語の類型学』において活格言語における形容詞の欠如について述べているが、これより4年前に出版した『能格性の一般理論』 [13, pp. 171-172] においては能格言語だけではなく、活格言語にも形容詞が存在しているとしているのである。これらの言語においては、名詞の修飾語として用いられる形容詞的成分は、状態動詞の語幹部分であり、またそれも被修飾語に後置されるのが原則であったという [14, pp. 103-109]。たとえば南米のグアラニ語では、cunhã-poranga 「女・美しい」、cunhã-kirá 「女・太った」、aba-kirá 「男・太った」、ubaia-catu 「果物・良い」のようになり、北米ムスコギ語族のチョクタウ語では mañi čito 「風・大きい＝大竜巻」、mañi lašpa 「風・熱い」、mañi kałlo 「風・強い」、oka kapassa 「水・冷たい」、oka lašpa 「水・熱い」のようになるという。

これら活格言語であることが後に判明する諸言語についての記述においては、従来は形容詞という品詞をたてる研究書も多くみられたが、その何れも被修飾語とともに例示されるのが常であったという。このことと先に述べた位置の問題とを考え合わせれば、これら

の「形容詞」は、状態動詞から語幹部分を抜きだしたものであって、状態動詞が「形容詞」から派生したものではないと、考えるのが至当である。事実、稀な例として、活格言語類型の後期にあると考えられるナデネ語族のいくつかの言語において、接頭辞を用いて形容詞が動詞から派生するばあいが見られるという[14, p. 106]。たとえば「白くある」という動詞語幹 -gai から派生したマツトレ語 li-gái、ナヴァホ語 li-gai, l'gai「白い」のような形容詞のばあいである。またクリモフがサピアを引用して[3]、北米のサリナン語においてほとんどの形容詞が、かつての状態動詞の接辞 k- をもっているとしているが[13, pp. 172-173]、これも上述したことの傍証となる。

独立した形容詞の欠如と関連しているのは、一方ではこれらの言語では、指小辞、指大辞などの接辞の使用が頻繁であること、他方では名詞が性質形容詞あるいは関係形容詞の代用をする場合の存在することである。たとえばトリンギット語では、dlèt「雪」、tix「氷」、ta「石」などがそれぞれ「白い」、「硬い」、「石の」を意味し、トゥピ語ではaba「インディアン」、itá「石」、nhauúma「粘土」などがaba-nheenga「インディアン語＝トゥピ語」、ita-oca「石の家」、nhauumb-oca「粘土の家」のように用いられるばあいである[14, p. 107]。詳しい観察が必要であるが、これらの例からみる限りでは、名詞が修飾語として用いられるのは、主として二つの概念を概念づけるための関係形容詞としてであるように見える。クリモフもそう考えているようである[13, p. 172]。もしそうとすれば、従来ともすれば形容詞が名詞の性質の抽象化によって生じたとする漠然とした考えが、正しくないということになる。

クリモフが挙げている例からみれば[13, p. 474]、少なくとも能格言語には形容詞があったと考えられるから、形容詞は能格言語において漸次形成されたと考えてもよさそうである。そうとすれば、形容詞の独立は、この種の言語においては、漸次意味上の他動詞が能格とともに用いられ（能格動詞）、意味上の自動詞及び状態動詞が、絶対格とともに用いられる（絶対動詞）傾向を強めていくことと、関連があると考えられる。これは単なる推測であるが、行為動詞の中の意味上の自動詞が絶対動詞に移行することによって、行為に対する能動性と非能動性という原理が支配的になってくるに伴い、絶対動詞に含まれていた状態動詞が一時的状態を示すものと性質を示すものに分化し、やがて形容詞を独立した品詞として生み出したのではなかろうか。もしそうとすれば、独立の品詞としての形容詞も、決してすべての言語に普遍的なものではなく、やはり主語・述語・目的語の関係によって規定されたものに過ぎない、ということになる。

日本語については著者は全くの門外漢であるが、形容詞と動詞の統語的・形態的な類似をみれば、あるいは以上のことは、日本語にも妥当することかも知れないという、気がしないでもない。

筆者はこれまで言語と認識の関係について興味をもち、近年はこの観点から動詞の意義構造についていささか考えていたが、20年ほど前にたまたまクリモフ等の著書に接するに及んで、激しい驚きを感じない訳にはいかなかった。そこには言語にとって普遍的なもの

と思われた、他動詞・自動詞の区別、主格、対格のような格の体系、能動と受動の対立などというものが、決して普遍的なものではなく、対格言語という、言語の特定の発展段階にのみ、特有のことがらだとされていたからである。また言語によっては、活格言語から能格言語を経て、対格言語に発展したのも、活格言語から直接に対格言語になったものもあり、インド・ヨーロッパ諸語は後者に属する可能性が高いことなども、述べられていた。印欧比較言語学は、このような内容的類型学の観点の導入によって、大きく変わる可能性を持ちはじめている。さらに活格言語類型が、アフリカのバントゥー諸語にみられるような、多分類言語から発展した可能性の高いことも報告され、この方面での研究にも、注意が注がれるようになってきた。この方向は、1866年にパリの言語学会が、科学的根拠の薄弱であることを理由に会として取り上げないことを決議した、言語起源論に新たな道を開くものになるかも知れない。

このような状況の下で、筆者がこれまで関わってきた文法論及び意味論も、深刻な影響を受けない訳にはいかないことになってきた。これが筆者が内容的類型学を学ぼうとした、主な理由である。もちろんこれは未だ比較的若い学問であり、多くの点でまだ分からないことも多い。筆者の理解の行き届かないところも多々有ると思われる。それにも関わらず今回、京都大学出版会の好意ある計らいで、類型学に関する書物[19]を出す運びになったのは、偏にこの学説のもつ、重要性のためであり、これによって類型学の研究を専門にしようとしているわけではない。専門的な研究は気鋭の方々にお任せしたいと思っている。

ともあれ、この書物について一応の説明をすれば、これは四部に分かれている。第一部は「類型学の概念」であって、フンボルト、サピアの先駆的な学説から、ロシアにおける類型学的研究の歴史を概観し、能格言語と活格言語について大まかな説明をしている。第二部は「ロシア語の類型学の諸問題」であって、これまでロシア語に特有ではあるが、特に説明はできないと考えられてきた一連の現象が、内容類型学の立場からすれば、実は深い内的連関を持っているのではないかという、問題提起を行おうとしたものである。第三部は「形式的類型学」であって、従来の形式的な類型学が扱ってきた諸概念が、内容的類型学との関係において、精密な記述を受ける方向にあるのではないかという観点から、ロシアのレヴジンの研究[17][18]に基づいてこれを概観した。また第四部は比較言語学が、内容的類型学によってどのように変貌し、どのような発展を行おうとしているかを、ガムクレリゼ・イヴァーノフの所説[9]を中心に、デスニツカヤ[11]、カツネリソン[12]、グフマン[10]等の研究など、このような所説に至った背景と共に概観したものである。行論は大ざっぱで手荒いが、なにがしかの意味を持ちうればと考えている。

1995.6.10.

## 関係文献

- [1] Wilhelm von Humboldt, *Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*, Berlin 1836. 邦訳: 亀山健吉『言語と精神』法政大学出版社 pp. 173-186.
- [2] Vilém Mathesius, *Deset let Pražského lingvistického kroužku, Slovo a slovesnost*, 2, Praha 1936-1937, 3/4 1936, pp. 137-145.
- [3] Edward Sapir, Supplementary Note on Salinan and Washo, *IJAL*, 1921, vol. 2, pp. 69-70.
- [4] Edward Sapir, *Language, An Introduction to the Study of Speech*, New York 1949.
- [5] Edward Sapir, *Culture, Language and Personality*, Berkeley and Los Angeles 1958.
- [6] Friedrich Schlegel, *Ueber die Sprache und Weisheit der Inder*, Heidelberg 1808. Rep.: *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, vol. 1., Amsterdam 1977.
- [7] August Schleicher, *Die Sprache Europas in Systematischer Übersicht*, Bonn, 1850. Rep.: *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, vol. 4.
- [8] Vladimír Skalička, Ein typologisches Konstrukt. *Travaux Linguistique de Prague*, vol. 2., Prague 1966, pp. 157-163.
- [9] Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, *Индоевропейский язык и индоевропейцы*, Тбилиси, I, II, 1984.
- [10] М. М. Гухман, *Историческая типология и проблема диахронических констант*, М. 1981.
- [11] А. В. Десницкая, *Сравнительное языкознание и история языков*, М. 1973.
- [12] С. Д. Кацнельсон, *Типология языка и речевое мышление*, Ленинград, 1972.
- [13] Г. А. Климов, *Очерк общей теории эргативности*, М. 1973.
- [14] Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, М. 1977.

- [15] Г. А. Климов, *Типологические исследования в СССР (20–40-е годы)*, М 1981.
- [16] Г. А. Климов, *Принципы континентальной типологии*, М. 1983.
- [17] И. И. Ревзин, *Современная структурная лингвистика*, М. 1977.
- [18] И. И. Ревзин, *Метод моделирования и типология славянских языков*, М 1967.
- [19] 山口 巖『類型学序説』京都大学学術出版会 1995年10月.